

佳作

未来の僕よ声をあげろ 宮城県岩沼市立岩沼西中学校 2年 川野 重太朗

未来の僕はどこで何をしているだろう。いずれにせよ、僕の小さいことでよくよする性格は、残念ながら変わっていないと思う。未来の僕は勉強や仕事で悩んだり、もしかしたら来年の中総体のテニスコートでピンチになっていたりするかもしれない。そんな時に前を向けるように、未来の僕に向けてアドバイスを書いておく。

夏休み三日目、僕は県大会のテニスコートにいた。ダブルスのペアは、この試合で初めて組んだ先輩で、僕たちはお互いになるべく声を掛け合って動きを連携したり励まし合ったりしようとしたが、負けてしまった。この時3年生にとっては最後の団体戦だったので、負けと同時に先輩たちの引退が決まった。僕は個人的に悔しいというよりも、先輩たちに申し訳ないという気持ちで顔向けができなかった。もっと練習すれば良かったという後悔は何の役にも立たなかったし、その場で僕にできることといえば、声を出すくらいだった。

僕たちは日頃の練習ではあまり声を掛け合っていなかった。理由は、必死になっているみたいで格好悪いとか、マナーが悪いとか勝手に思っていて、実際僕たちのチームも物静かにプレーしていた。そして、市の大会では、個人戦で掛け声の元気なペアに負けてしまい、相手に試合の雰囲気を持っていかれたような悔しさや、大声で励まし合うペアをうっとうしく思う気持ちがあった。ところが県大会に行ってみると、ほとんどのチームが良いプレーがあったらほめて、ピンチの時は励まし合っていた。それを見て僕は、

「皆声を出しているじゃないか。この空間だと、声を出さない方が恥ずかしい。他のチームの真似をして僕も声を出してみよう。」

と思った。

しかし、次第に僕たちが押されている状況になり、ドンマイくらいしか言葉が出てこなくて、結局チームの雰囲気を勝つ方向に持っていけなかった。

先輩たちが引退した後、僕は副部長になった。これからは静かな部活ではなく、活気のある部活をつかっていきたいと思う。そのために、一本一本集中して打ち、恥ずかしがらずに声を出すことを部員全員が自然にできるように自分が声を出すので、それを真似してほしい。日頃の練習で声を出せば、本番でもできるはずだ。そうして県でも通用できるチームにしていく。声だけが全てではないが、実力が競り合っている時は、声を出して活気のあるチームが勝て

ると僕は経験から学んだ。

僕はテニスを始めたのは中学校に入ってからで、それまでは空手をしていた。空手のポイントは自分が技を決めたものが全てだが、テニスは自分のミスが相手のポイントになってしまう。正直、自分がミスをした時に、どんな内容であっても相手が声を出して反応すると、もうミスできないと緊張から硬くなってしまい、それがさらにミスを引き起こす悪循環になっていた。一方で相手のミスに対して過度に反応し、声を出すことはマナー違反だと指導者から教えられている。だから、自分たちのナイスプレーをほめ合ったり、苦しい時に励ます前向きな言葉で盛り上げようと思う。

この夏休み、僕は「チーム全体で強くなる」ということを考えてみた。空手をやっていた時は、ほぼ個人戦だったので、単純に勝てば嬉しいし、負ければ悔しがっていたが、ペアのいるダブルスや、団体戦で勝つためには「チーム全体で気持ちを一つにして向かっていく必要がある」ということを教えられた。

個人個人が練習して強くなることはもちろん大切だ。それが合わさったところで、単純な足し算以上の力を引き出すにはどうしたらいいだろうと考えてみた時に、声を掛け合うことは十分にきっかけとなり得るはずだ。県大会で、僕が声を出したことで先輩たちも、

「聞こえたよ。」

などと言ってくれたから一つにまとまって頑張ろうという雰囲気になれたとしたら嬉しいし、先輩たちが少しでもこのメンバーで戦えて良かったと満足して引退できていたら嬉しい。幸い僕は岩沼西中テニス部として県大会のコートに戻ってくるチャンスがあり、この夏休み、皆で集まって自主練を始めたところだ。やはり、先輩と組んでいた時のようにはいかないことも多く、試行錯誤の練習だけれど、どんなに足踏みしていたって必ず成長している。そこでさらに経験を積んで、未来の自分に伝えるアドバイスもバージョンアップするつもりだが、今の時点で僕が言いたいことは、

「ピンチの時こそ声を出せ。」

ということだ。僕も明日から、つらい時、苦しい時には皆の先頭に立って元気な声を出し、練習を盛り上げ、夏の暑さに負けずに、乗り切っていきたい。